

説教 『まなざし、言葉、霊』山本 護牧師  
聖書 エゼキエル書 37：9～10／ヨハネ福音書 5：1～9

甲府での「信教の自由を守る日」礼拝で、「つぶて、石ころの信仰(ルカ 19:39~40)」と題する説教をした。投石するインティファダ(民衆蜂起)にも触れ、昔、拙宅に泊まった二人のパレスチナ人のことを思い出して胸が痛む。彼らは慎ましく柔らかな雰囲気のある若者だったが、帰国後インティファダでイスラエル兵に殺された。拙宅での朝、彼らは丁寧に、蒲団を筒状に丸めて片づけてくれた。

38年間病んでいる人に(ヨハネ 5:5)、イエスが「起き上がりなさい。床を担いで歩きなさい(5:8)」と命ずると、「その人はすぐに良くなって、床を担いで歩き出した(5:9)」。ははあ、「床を担いで」とは、ムシロか薄い布団を丸めて筒状にし、ひょいと肩に乗せたのだな、と思い描くことができる。

「ベトザダ=憐れみの家」と呼ばれる池の畔に五つの回廊があり(5:2)、「この回廊には、病気の人、目の見えない人、足の不自由な人、体の麻痺した人などが、大勢横たわっていた(5:3)」。38年間病んでいる男もここに伏せていた(5:5)。実体としても、象徴としても、世の苦しみや蔑み、暗さや惨めさを物語っている池畔の回廊。言い換えれば、世の絶望をかき集めて、厄介払いされる場なのだ。

イエスはじっと見つめ、男の奥底を深く見通した(5:6)。想像すると、男の虚ろな目やなんとも不快な体臭まで感じられる。イエスは「良くなりたいか」と真っ直ぐに問う(5:6)。この言葉には不可思議な力がある。イエスの問いが虚無に沈んで硬直していた男を揺さぶる。男は答えるのも億劫だったが、言葉の力に揺り動かされて、悲惨な状況を訥々話した。「主よ、水が動くとき、わたしを池の中に入れてくれる人がいないのです。わたしが行くうちに、ほかの人が先に降りて行くのです(5:7)」。なんと、こんな最底辺の場であっても「我先に」の奪い合い競争があり、介助など到底望めない。

男はなぜ「良くなりたいです」と率直に答えられないのか。長年の間、失望の連続だったから、期待してこれ以上傷つきたくないのだ。イエスは孤独で干からびた心に打たれ、有無を言わせない口調で「起き上がりなさい(5:8)」と命じた。「すると、その人はすぐに良くなって、床を担いで歩き出した(5:9)」。癒しは、そのまま赦しの現われ。赦しとは、人間存在が根本から肯定されること。イエスは空虚に沈んだ「無」も同然の男を見だし、ゆり動かし、つぐんだ口を開かせ、力強く立ち上がらせた。

イエスのまなざしや言葉に、いったいどんな力が働いたのだろうか。後にイエスはこう述べている。「わたしの父は今もなお働いておられる。だから、わたしも働くのだ(5:17)」。イエスの業はそのまま、父なる神の働きだ。そのまなざしは神の赦しとして、その言葉は神の瑞々しい命として現れる。

「主なる神はこう言われる。霊(ruah)よ、四方から吹き来たれ。霊よ、これらの殺されたものの上に吹きつけよ。そうすれば彼らは生き返る(エゼキエル 37:9)」。インティファダで殺された二人も、世に厄介払いされた病者たちも、霊の言葉で息(ruah)を吹き返す。「すると、霊が彼らの中に入り、彼らは生き返って自分の足で立った(37:10)」。38年間病んでいた男が立ち上がって歩き出したのも(ヨハネ 5:9)、イエスの言葉が男を揺さぶり、心身に風穴が開けられ、神の息吹なる霊がそこを吹き抜けたから。



【おまけのひとこと】

霊が吹き抜ける風孔 目 耳 口 鼻 尻もその一つか 瞑っていたら 塞いでいたら 霊に気づくまい 閉ざすことは拒絶の意志だから 色々な孔を開き 心も開いて 霊が吹き抜けるように